

## 公開講演会・シンポジウム：学際的歴史学をめぐって

### はじめに

以下に掲載されるのは去る1997年5月に、立命館大学文学部人文学会の主催でおこなわれた公開講演会および公開シンポジウムそして対談の記録である。

立命館大学文学部人文学会は、1997年に学部創立70周年を迎えること、そして1996年に文学部人文総合科学インスティテュートを開設したことを記念して一連の公開講演会を開催してきた。そして1997年5月には、歴史学の分野で先端的な研究領域を切り拓いてきたナタリー・ゼーモン・デイヴィス氏（トロント大学教授・プリンストン大学名誉教授）をお迎えしてその第九回公開講演会をおこなった。

『愚者の王国・異端の都市』（平凡社）をはじめとして、映画製作への協力をきっかけとして構想された『帰ってきたマルタン・ゲール — 16世紀フランスのにせ亭主騒動』（同上）など氏の歴史研究は、狭義の歴史にとどまらない文化研究としての広がりや深さそして挑戦を含んでいることは衆目の一致するところであろう。

立命館大学国際言語文化研究所は、人文諸科学、文化研究、文化人類学などとの広範な対話からうまれた氏の業績に大きな関心を寄せ、今回の成果を招聘者である文学部人文学会の同意のもとに研究所の紀要に掲載することとなった。

氏のご講演、シンポジウム、対談の日程は以下のとおりであった。

1997年5月28日 山口昌男氏（札幌大学文化学部長）との対談

5月30日 公開講演会「文化の混交を問い直す」

5月31日 公開シンポジウム「戦いの場としての歴史 — 話し言葉の世界と文字世界との出会い」

山口昌男氏は文学部創立70周年、文学部人文総合科学インスティテュート開設記念連続講演会の第一回講演会で人類学と歴史の交差する位置から西園寺公望についてご講演いただいたご縁もあり、歴史研究と文化人類学研究との同時代的な展開をめぐってナタリー・デイヴィス氏と対談をおこなっていただいた。この提案をご快諾くださった両氏に深く感謝いたします。なおここではこの対談を英語で全文掲載する（部分的な邦訳が『ユリイカ』1997年11月号に掲載されているので参照されたい）。

公開講演会「文化の混交を問い直す」は、イスラム教徒でありながら、奴隷の境遇

を経験し、ローマ教皇の顧問学者として重きを成し後にイスラム世界に帰還するという数奇な運命をたどった16世紀の人、レオ・アフリカヌスを主題に、文化の多元性とは複数のアイデンティティーとは何か、それはいかにして可能かというきわめて今日的な問題を提起した興味深いものであった。ただ残念なことに著作権の問題からここでは英語原文の掲載は見合わせざるをえなかった。講演の邦訳は『現代思想』1998年4月号に掲載されているので関心をおもちの方は是非参照されたい。

公開シンポジウム「戦いの場としての歴史」では、文学部人文総合科学インスティテュートのスタッフと、副題に示されたとおり「話し言葉と文字世界の出会い」という文化をめぐる根源的な主題をめぐって氏との意見交換が試みられた。ここでは各参加者はあらかじめ欧文の原稿を氏にお渡しして、日本語で報告し、氏の報告は邦訳テキストを配布したうえで英語でお話ししていただくという形を試みた。質疑応答については通訳を本学講師の森節子氏にお願いした。さまざまな事情で当日直前になった無理なお願いをお引き受けいただいたことを感謝いたします。このシンポジウムについては欧文原稿および邦訳のテキストの両方を掲載する。デイヴィス氏の報告、コメントの邦訳は報告者のひとりでもある唐澤靖彦氏による。

これらの日程を精力的にこなした後、氏は東京でのぎっしり詰まった日程を消化し北海道での日本西洋史学会でのご講演をおこなって帰国された。お会いした瞬間から本題に入り、息をつかせず次々に問題を提起して行く氏のエネルギーな話ぶりにたがわぬ密度の高い日本滞在であったと思われる。われわれが氏から裨益したものをこうした形で多くの人々に提供できることをたいへんうれしく思い、そのことを快諾された氏に感謝の言葉を捧げたい。

(渡 辺 公 三・1998年3月)